

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	毛沢東の魯迅評価について
Sub Title	Mao Zendong's evaluation on Luxun
Author	小山, 三郎(Koyama, Saburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.194- 216
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0194">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0194</a>

# 毛沢東の魯迅評価について

小山 三郎

- 一、問題の所在
- 二、一九三〇年代の中国共産党の文芸政策  
—上海の左翼文壇と江西ソビエト区—
- 三、抗日民族統一戦線における文学の役割
- 四、結語—毛沢東の魯迅評価—

## 一、問題の所在

毛沢東は、一九四〇年一月の「新民主主義論」において、新民主主義の文化は「人民大衆の反帝・反封建の文化であり、今日では、抗日統一戦線の文化である。この文化はプロレタリア文化思想、すなわち共産主義思想に指導されるほかになく、いずれの他の階級の文化思想によっても指導され得ないものである。新民主主義の文化とは、一口でいえば、『プロレタリアートの指導する人民大衆の反帝・反封建の文化』である」と規定した。その際毛沢東は、「魯迅こそこの文化的新鋭軍のもっとも勇敢な旗手である。魯迅は中国の文化革命の主将であり、彼はたんに偉大な文学者であるだけな

く、また偉大な思想家ならびに偉大な革命家でもある。魯迅の骨はもつとも硬く、彼には奴隸的な根性やこびへつらう態度は露ほどもなく、これは植民地や半植民地の人民のもつとも尊い性格である。魯迅は、文化戦線で、全人民の大多数を代表しており、敵に向かつて突撃し、その陣地を陥れるうえでもつとも正確で、もつとも勇敢で、もつとも果敢で、もつとも忠実で、もつとも熱心な、空前の民族的英雄である。魯迅こそ中華民族の新文化の方向である<sup>(1)</sup>と魯迅を高く評価した。

この毛沢東の魯迅評価は、「文化革命は政治革命・経済革命のイデオロギー面への反映であるとともに、またそれらに奉仕するものである。中国では、文化革命も、政治（革命）と同様に、統一戦線のなものである」、「新民主主義の文化は大衆的である。それは全民族中の九〇パーセント以上の労働農民衆に奉仕するとともに、しだいに彼らの文化となるべきである。―中略―すべての進歩的な文化工作者は、抗日戦争中には自己の文化部隊を有すべきであり、この部隊こそ人民大衆である。文化人と文化思想が大衆に近づかないなら、それは『空軍指令官』または、『無兵指令官』であり、この火力は敵のところまでとどかないであろう。この目的を達成するためには、文学は、一定の条件の下で改革されなければならず、言語は民衆に近づかなければならず、民衆こそ、すなわち革命的文化の無限に豊富な源泉であることを知らなければならぬ<sup>(2)</sup>」という文脈のなかでなされたものである。

ここには毛沢東が一九三六年十月に死去した魯迅を、抗日民族統一戦線下でどのように認識していたのかが如実に現われている。そしてこの評価は、一九四二年延安文芸講話において左翼作家に対してより系統的に示され、それ以降毛沢東及び中国共産党の「公式」の魯迅評価となり現在に至るのである。

このように評価された魯迅は、一九三〇年に中国共産党によって設立された左翼作家連盟に参加し、国民党政府の文

化政策に対抗し、「無産階級文学運動」を指導していた。この左翼作家連盟は、文学史上魯迅が中心となり、結成された団体として語られている。しかし、結成当初から魯迅と党文学官僚との間には政治と文学に関する認識の違いが存在していた。そのため魯迅と党文学官僚の間には幾多の文学論争が発生し、一九三六年には国防文学論争として上海の左翼文壇を二分する論争へと発展する。ここでは中国共産党の提示した抗日民族統一戦線に文学がどのような役割を果たすべきかという問題をめぐり、魯迅と党文学官僚の間に議論が闘わされたのである。

このような経緯があるにも関わらず毛沢東は、魯迅が死去した直後から彼に高い評価を与え、冒頭で示したように「新民主主義論」では魯迅を抗日統一戦線を推進する際に「文化革命の主将」として位置づけたのである。

本稿は、魯迅の晩年における党文学官僚との論争をつうじて現れた彼の文学活動と、それを支える文学精神を明らかにし、魯迅死後、彼が関わった国防文学論争がどのように評価されたのかを考察し、しかるのちその評価を決定づけた文学潮流を分析することから毛沢東の魯迅評価のもつ意図を明らかにしようとするものである。

最初に左翼作家連盟内部に存在した二つの文学潮流、すなわち魯迅と党文学官僚との論争を分析し、さらに上海の左翼文壇を中心としたこれらの論争が、江西ソビエト区を中心に発展していた文学潮流とどのような相関関係にあったのかを明らかにすることにする。

## 二、一九三〇年代の中国共産党の文芸政策

### ―上海の左翼文壇と江西ソビエト区―

既に指摘したように左翼作家連盟（以下、左連と略称する）は、一九三〇年に中国共産党の指導により成立した組織

である。ここから中国共産党が文学面に積極的に関与し始めるのである。その際に中国共産党は、文壇における魯迅の存在に注目した。一九二八年から二九年にわたって創造社、太陽社の文学団体に所属する黨員作家と魯迅の間に革命文学論争と呼ばれる論争が存在したが、論争を調停し両者を和解させたのは李立三をはじめとする中国共産党の指導者であった<sup>(3)</sup>。このことは、当時の党中央の指導部が魯迅をいかに重視していたかを示すものである。魯迅は当時進歩的知識青年に多大の思想的影響を及ぼす作家であったことから、中国共産党は国民党政府と対決する際に魯迅を左翼文壇に引き入れることを必要不可欠のものと考えたのである。

そもそも革命文学論争とは、一九二七年蔣介石の四・一二クーデターにより国民革命が挫折した政治状況のなかで翌二八年に革命文学者が革命文学を提起し、魯迅を「プチ・ブルジョア文学者」、「革命に落後した文学者」と批判したことから始まった論争である。この論争に参加した一連の革命文学者は、概ね日本留学経験をもち、当時の日本プロレタリア文学の影響を色濃く受けていた。彼らは、一様に宣伝としての文学の機能に着目し、文学は無産階級に奉仕するものであり、階級意識を喚起する一つの道具として認識していた。そして彼らは、その機能を果たすために作家に唯物弁証法を把握することを要求したのである。

こうした主張に対し「有産者文学の代表」として批判された魯迅は、文学には宣伝としての機能があることを認めつつも、それだけを目的とする文学は何ら現実に対して機能しないと反論したのである。ここには魯迅の文学観があらわれていた。魯迅にとり文学は、他人に命令されて創作するものではなく、利害を顧みずにあるがままに心のなかから流れでるものであった。この魯迅の文学認識は、彼にとり中国革命の現実と密接に関わりあっていた。一九二八年魯迅は、国民党政府の知識人に対する弾圧のなかで、文学に内在する価値に依拠することで革命的であった魏晋の時代の文学者

像を検証し<sup>4</sup>、それを称えることで彼の文学者としての立場を表していた。ここに魯迅がすでに『中国小説史略』であらわしていた彼独自の中国文学に対する視点<sup>5</sup>が存在する。すなわち中国文学の発展には、政治に対して文学の自律性は不可欠のものであり、このため文学者は従来の諷諭教化を主流とする伝統的な文学観と決別しなければならないとする文学的立場がそれである。

この魯迅の文学観は、彼が作家として出発した一九一〇年代後半の時点から一貫して彼の文学の根底に存在し、それから生み出された作品は文学者としての彼が中国の現実に関わりあう行為であった。したがって魯迅は、革命文学者の主張のなかに彼が忌み嫌っていた伝統的な文学観と軌を一にする発想によって支えられた旧態依然とした文学観を見だし、彼らの文学者としての体質を問題にしたのである。

しかし革命文学論争が終結し、魯迅と論争相手の黨員作家は大同団結したにもかかわらず、そこに現われた論点は依然として解決されないまま左連の内部に引き継がれる。そこには政治と文学の関わり方に関して、異なる見解が存在したのである。このことは、左連の結成大会で採択された活動方針に如実にあらわれていた。すなわち、それは無産階級の文学運動は革命闘争を宣伝し鼓舞する武器としての任務を確実に達成し、思想闘争を強化し広範な大衆を無産階級の闘争の陣営に引き合わせる、とする方針<sup>6</sup>である。ここでは無産階級文学は、党の政治主張に歩調を合わせることが要求され、「中国労働兵ソビエト革命によって課せられた任務<sup>7</sup>」を達成しなければならないという目標が設定されていた。

文学を政治に従属させるこうした主張は、魯迅が文学活動を開始してから、また革命文学論争を通じて一貫して糾弾してきたものであったが、党文学官僚の確固とした文学に対する基本的な立場でもあった。したがって一九三一年九月の満州事変以降、左連内部でプロレタリア文学の政治性が重視され、左連が半政党的な役割を担うようになるにつれて、

魯迅と党文学官僚の間には微妙なあつれきが生じるのである。特に政治の文芸に対する束縛を批判し文学の絶対的自由を主張した第三種人文学者との論争は、左連内部に党文学官僚と魯迅との間に彼らに対する対応の違いを引き起こし、そこからある種の確執が出現した<sup>8)</sup>。それは、魯迅が周揚の第三種人文学者を批判する際に示した態度を批判したために起きたものである。またそれは、当時党中央が知識人の抗日救国の動きを国民党政権の延命に役立つものと認識し、同伴者の存在を否定したのに対して、魯迅が同伴者の必要性を唱えていたことに拠るものである。

ここには魯迅の文学的姿勢が如実に現われていた。魯迅は、第三種人文学論争、さらにほぼ同じ時期に行なわれた林語堂、周作人らが提唱した小品文に対する批判をつうじて、作家に時代状況への抵抗の精神を一貫して求めていた<sup>9)</sup>のである。この魯迅の文学姿勢は、文壇に表出していた小説の衰弱現象のなかに社会の衰弱現象を見出す視点から生じていたものであり、作家に時代状況へ主体的に関わる責務を求めたものであった。従って、それは党の政策に従属する党文学官僚の示した文学姿勢とは明らかに異質のものであった。

このような文学観の違いから、一九三四年の秋以降、魯迅と党文学官僚周揚は対立へと向かっていく。そこでは作家間の複雑な人間関係を背景<sup>10)</sup>に、中国共産党の提示した抗日民族統一戦線に対して、文学の果たす役割をめぐって議論が闘わされたのである。

一九三六年の春に上海の左翼文壇を二分する国防文学論争は、以上のべてきた左連内部の作家間の紛糾が抗日民族統一戦線をめぐって噴出したものであった。既に一九三五年の暮れには、党文学官僚周揚と魯迅の愛弟子の胡風の間で文学上の「典型人物」をめぐる文学論争が発生し、双方の抗日民族統一戦線をめぐる立場の違いが文学理論の食い違いをつうじて明らかにされていた。

国防文学論争は、抗日民族統一戦線という政治の場で、文学の「神聖」な任務をめぐって争われた論争と考えることができる。この論争は、中国共産党の提示した抗日民族統一戦線政策に呼応するために周揚が国防文学のスローガンを提起し、左連を新政策にそぐわないものとして一方的に解散させて新しい文学者の団体を設立したことから発生したものである。こうした状況のなかで胡風は、魯迅の意向を受けて周揚の国防文学のスローガンに對抗して、一九三六年六月に「人民大衆は文学に向かつて何を要求するか」を発表し、そのなかに「民族革命戦争の大衆文学」のスローガンを提起するのである。

胡風のこの論文は、左連を解散させて新しい文学団体を設立させた周揚の一連の言動に対する反発をあらわすものであった。そして彼は、「民族革命戦争の大衆文学」のスローガンを「一切の社会紛糾の主題を統一したものである」とあり、現実の生活要求から生まれたものであると定義した<sup>11)</sup>のである。これに対して周揚は、こうした胡風の言動は統一戦線を破壊するものであると断定し、国防文学は、現実主義文学であり「現実を、我々にさまざまな材料を提供してくれるが、現実の真実を表現するには、決してわけへだてなくあらゆる生活現象を描いてはならず、時代の中心的内容・社会発展の主要な目標と方向を捉えなければならない」と主張する。この周揚の見解は、「あらゆる作家同志間に一つの大きな変動が生じ、元来は思想的流派が異なり互いに離れ離れた作家も、現在ではみな一つの共通の目標のもとに団結することが可能になった<sup>12)</sup>。」そのため一つの統一な文学スローガンが必要になるといって現状認識に裏打ちされていた。

こうした立場は、論争の過程で魯迅が胡風の見解を補足し、「民族革命戦争の大衆文学」は無産階級革命文学の現在における一つの発展であるとのべた時、「そうになると、それが現段階における文学の分野での統一戦線のスローガンとはならないことは自明のことであり、『左』のセクト主義者の大言壮語も戈をおさめるべきであろう<sup>13)</sup>」という周揚の魯迅



に對する批判になる。ここに左連を抗日民族統一戦線の主旨にそつて解散させようとする党文学官僚の立場と、抗日民族統一戦線政策に参加することで、あくまで左翼作家の主体性を主張した魯迅の立場の違いがあらわれていた。

この論争は、一九三六年七月に魯迅、巴金らが「文芸工作者宣言」を発表するに及び、魯迅を中心とする左翼作家と党文学官僚のグループの全面対決という局面をむかえる。こうした状況のなかで魯迅は、周揚、夏衍、田漢らを名指しで批判し、「国防文学」に現われた文学創作の態度とそこから派生すると思われるセクト主義的傾向に注意を促したのである。ここには国防文学は、中国の現実に何ら作用することのない文学理論であり、周揚の一連の言動は、魯迅自らが推進してきた左翼文学運動の發展を阻止するとの認識がある。こうした認識は、革命文学論争から始まり左連内部で繰り返された幾多の文学論争のなかから生み出されたものである。

では魯迅は、この時期の中共の政治路線の轉換をどのように受けとめていたのであるうか。馮雪峯は、魯迅が抗日民族統一戦線を支持するには、大きなジレンマが伴っていたと回想している<sup>14</sup>。ここで魯迅が「いま中国の革命的政党が、全国人民に提出した抗日統一戦線の政策は、わたしは見た、わたしは支持する、わたしは無条件にこの戦線に加入する<sup>15</sup>」と語り、抗日民族統一戦線を支持するのは馮雪峯の説得<sup>16</sup>が大きな役割を果していたものと考えられる。こうした状況のなかで魯迅が「民族革命戦争の大衆文学」のスローガンを提出したのは、新しい政策によって革命文学の精神が薄れ、消し去られることを恐れた結果であり、左翼文芸の發展を保証することを前提にして、中共の政策と自己の立場との間に見出した妥協点であったと考えられよう。国防文学を作品原則上の標識にして作家を組織しようとした党文学官僚に対して、魯迅が国防文学は作家間の標識に過ぎないとしてあくまで作家の創作の自由と主体性を重視したのは、抗日民族統一戦線に對する彼の以上の立場と密接に關係するものであった。ここから革命文学論争から国防文学論争に

至るまで、党文学官僚にむけられた魯迅の文学者としての一貫した姿勢を見出すことができるのである。

以上から国防文学論争は、魯迅が左翼文壇に参加して以来、党文学官僚との文学観の違いから党の政治路線に対して異なった立場を示し続けてきた結果から生じてきたものであると結論できる。国防文学論争が上海の文壇を二分する論争に発展したのは、魯迅に追隨し左連に参加した<sup>(17)</sup>多くの左翼作家も、党文学官僚とは異質の文学観をもっていたことによる。

一九三六年八月以降、中共党内には論争を終結させようとする機運が生じるが、そこに提出された調停方法は『国防文学』は作家間の関係の標識であると同時に、作品原則一般の標識ともなしうる<sup>(18)</sup>という魯迅と周揚の双方の立場を認めるというものであった。ここには、双方の創作理論とそこから生まれる政治路線に対する作家の態度は問題にされなかった。しかし文壇の中心が上海からソビエト区に移り、抗日民族統一戦線が具体化するなかで抗日民族統一戦線に対する文学のあり方は、魯迅が主張した論点とは相反する主張に導かれていくのである。つぎに上海の文壇で紛糾が起こっていた時期の江西ソビエト区の文学潮流を分析することにする。

既に指摘したように上海において中国共産党が、本格的に左翼文壇に関心を向け始めたのは革命文学論争以降のことであった。これとはほぼ同じ時期、江西ソビエト区では毛沢東の指導によって文化政策が勃興していた。

一九二七年十月、毛沢東が江西省永新県三湾村で秋収暴動の部隊を改編した時、彼は各連隊に俱樂部を設け、文化娯楽活動を中心とした文化宣伝工作の強化を図った。それ以降、井冈山の革命根拠地で紅軍部隊は宣伝効果を高めるために標語、講演を基礎とした仮装宣伝、活話劇を演出するのである。ここから生み出された『収谷』、『打土豪』などの話劇、活報劇は、いずれも地主の農民に対する残酷な搾取と圧迫を表現していた。そのためこれらの作品は、農民群衆の

共鳴と彼らの階級的な憎しみを引き出し、土地革命の推進力となっていたのである。ここで作られた作品は、戦闘に参加した実在の人々と実際に起こった事件を表現するものであり、群衆の間では「文明新劇」と呼ばれていた<sup>19</sup>。

こうした試みは、一九二九年十二月に福建省の古田で招集された紅四軍第九次党大会で毛沢東が起草した「紅軍第四軍第九回党員代表大会の決議案」のなかに、宣伝工作として系統的に理論化されたのである。ここで毛沢東は、宣伝工作を軽視する一般的な考えを是正し宣伝工作の重要性を指摘し、各政治部は責任をもって各種の大衆の気分をあらわす革命歌謡を募集・編集し、軍政治部宣伝科は優秀な人材を全軍から集め、大隊のなかの士兵委員会にクラブを設け、文芸形式を利用して、文化娯楽活動を進めることを提唱した<sup>20</sup>。ここにソビエト区の文芸運動は、明確に進むべき方向が定められたのである。この時期に演じられた『年閏闘争』は、党の指導下で行なわれた農民武装暴動を主題としたものであり、中国現代話劇史上共産党の指導と農民運動を誉めたたえた最初の話劇であった<sup>21</sup>。

一九三〇年には、労農紅軍学校が成立するが、ここで演じられた演劇は根拠地の大衆に熱烈に歓迎され、紅軍学校はソビエト区の文化娯楽活動の中心になる。こうした活動は、翌三一年になると演劇家李伯釗の指導の下でさらに活発な運動となり、また中華ソビエト中央政府が創刊した『紅色中華』は、李伯釗の編集の下で党の政策を織り込んだ各種の文芸作品と文芸活動の現状報告を掲載していた。この時期に毛沢東が、李伯釗に宣伝隊を組織させ敵軍から蜂起した將兵に対して、演劇を通じて「誰のために犠牲になるか」を理解させるように指示した<sup>22</sup>ことは、演劇活動の任務を明確に表わしていた。李伯釗、胡底、錢壯飛等の指導者が集体創作した『為誰犠牲』は、そうした將兵の階級的自覚を促す任務をもっていた。

こうしてソビエト区では、党は演劇工作を宣伝活動の重要な手段とみなし、それを大衆のなかに浸透させていったの

である。一九三二年「八・一劇団」は、紅軍学校の指導下に專業の劇団として設立し、続いて労農劇社さらに翌三三年には、藍衫劇団学校が成立する。これらの劇団と学校の成立は、全ソ区の話劇工作を指導する組織が「形勢の發展により、政治文化工作の需要が益々發展し」<sup>23</sup>「てきたために緊急に必要とされていたことを表わしていた」。

ここから、農民大衆に党の政策を貫徹させる大衆工作の役割を担った作品が作り出された。労農劇社が上演した沙可夫の『我―紅軍』は、「疑いもなくソ区文化教育の新しい記録を切り開き、ソ区文化と労農大衆芸術の始まりを告げた」<sup>24</sup>と評価された。こうした評価は、「労農労苦大衆の手中に芸術という階級闘争の武器をしっかりと握みとり、全ての反革命の進攻を粉碎するために、我々は労農大衆芸術を創造しソビエト文化を發展させるための闘争を行なわなければならない」<sup>25</sup>という党の要求と密接に結びついていた。この目的を達成するためには、党の文化政策のなかで「労農大衆自身の文芸作家を養成する」<sup>26</sup>「ことが求められ、農民大衆のなかで流行していた革命山歌小調の収集」<sup>27</sup>などの文化工作が重要視されたのである。

こうしたソビエト区文芸活動は、一九三四年に瞿秋白が中心となって「ソビエト劇団組織法」<sup>28</sup>が制定した後に、さらに組織化され労農兵群衆のなかに浸透していくのである。この時期李伯釗は、中央ソビエト劇団を引率し各地で巡回公演を行ない、春耕生産、前線支援、第五次圍剿を粉碎するために大衆動員を行なっている。この巡回公演は、各地で創作の素材を収集し、演出しながら聴衆の反応を確かめ創作するという方法を用いて幾多の作品を生みだしていったのである。そこで彼らが演じた劇は、群衆の生活と彼らの感情、要求を直接反映し、群衆が喜んで見たり聞いたりできる文芸形式の採用を重視していた<sup>29</sup>。「紅色戯劇」は感情面で群衆と通じあうことで、革命的群衆を動員する武器としての機能を果たすことを目的としていたのである<sup>30</sup>。

一九三四年の秋、紅軍の主力部隊は中央根拠地から長征に出発する。李伯釗、沙可夫、胡底、錢壯飛は、軍に随行し北上する。この情況のなから根拠地では、瞿秋白の指導により労農劇社の団員は火星劇団、紅旗劇団、戦号劇団に分けられ、彼らは戦闘に加わりながら宣伝活動を展開していく。その後一九三五年一月、三つの劇団は合同の公演を行なったのちに解散し、各団員は各部隊に分散し遊撃戦争に参加していった<sup>31</sup>のである。

このような発展過程をたどったソビエト区文芸運動は、毛沢東の指導により紅軍が建軍以来文芸工作を重視し、文芸を軍民群衆を教育する重要な道具と規定したこと<sup>32</sup>によってその潮流が形成されてきたのである。ここでは、党の指導が貫徹し、実際から出発して大衆に服務し戦争の需要に服務<sup>33</sup>することが求められ、そのために文芸工作者は大衆と生活をともにし、大衆と一心同体になることが求められていた。すなわちソビエト区文芸運動は、その出発点から宣伝という機能を重視し、政治を遂行するのに不可欠な役割を果たすものとして位置づけられていたのである。

このソビエト区文芸運動は、同時期の上海の左翼文壇と人的交流を持っていた。魯迅と革命文学論争で激しく対立した創造社の成仿吾、同じく創造社の魏伝統、朱光らは党中央と左連からソ区に派遣された指導者であつた<sup>34</sup>。

つぎに魯迅死後、上海の左翼文壇を形成していた文学潮流とソビエト区の文学潮流が、どのように交わり、毛沢東の魯迅評価を形成していくのかを考察することにする。

### 三、抗日民族統一戦線における文学の役割

本章では第二章で明らかにした国防文学論争が、魯迅死後抗日民族統一戦線下でどのような評価を与えられたのかを考察し、魯迅死後の文学潮流の特徴を明らかにする。

既に指摘したように上海の左翼文壇には、政治と文学の関わり方に関して二つの考え方が存在していた。それは党の提唱した抗日民族統一戦線に対して、文学を手段として作家を組織しようとする立場と、作家の主体性をより重視し抗日民族統一戦線に参加しようとする立場であった。作家に抗日民族統一戦線への参加を呼びかける際に、前者は国防文学を作品原則上の標識にすることを要求するものであり、後者は国防文学は作家間の標識に過ぎないとしたのである。

ここで重要なことは、前者の立場はソビエト区の文学潮流と密接に関わるものであったという点にある。一九三七年五月にソビエト区で成仿吾は、「国防文学は、作家関係の標識であり、また作品原則の標識でもある。作家関係は、作品原則と分離することはできない。作家関係は、作品原則を通じて実現する。抽象的な作家関係は存在しない<sup>(35)</sup>」と発言していたのである。この発言は、国防文学論争における周揚の立場と同一のものであった。

成仿吾の発言は、一九三七年の時点で抗日民族統一戦線のなかでどのような意味を持つのであろうか。一九三六年十一月に保安で「中国文芸工作者協会」（毛沢東の提議により中国文芸協会と定められる）の成立大会が開かれた。成立大会は李伯釗、丁玲、成仿吾ら三五人が発起人として名を列ねていた<sup>(36)</sup>。ここで来賓として出席した毛沢東は、つぎのようによつた。「我々は、抗日をやらなければならないが、そのためには内戦を停止しなければならない。どのようにすれば内戦を停止することができるか。我々は、文武二つの方面からやるのである。文の方面からは、内戦の停止を願わないものを説得しなければならず、文の方面から全国の民衆が抗日のために団結するように宣伝教育し、それでもし文の方面で内戦の停止を願わないものを説得できないのであれば、我々は武を用いて彼らに迫り内戦を停止させるのである。皆さんのような文学者も前線にいつて戦士を鼓舞し、内戦の停止を願わないものを打ち負かさなければならぬ。——中略——ソビエトの労働大衆文化を發揚し、民族革命戦争の抗日文芸を發揚することは、皆さんの偉大な光榮ある任務であ

る<sup>37)</sup>と。また張聞天、博古は、中国文芸協会を民族革命戦争の戦闘力となし<sup>38)</sup>、「正しい文芸」を用いて偉大な英雄闘争の現実を反映し、ソビエトを抗日の核心として表現する<sup>39)</sup>ように希望するとのべた。

こうして中国文芸協会は、「党とソビエトの指導のもとで<sup>40)</sup>」、「ソビエト政権下の文芸工作の人材を訓練し、紅軍と群衆の闘争生活の各方面の材料を収集整理し、労働大衆の文芸小説、演劇、詩歌等を創作すること、全国の各種各派の作家と文芸工作者と連絡をとり彼らと団結し、抗日統一戦線の力量を強固なものにし、無産階級文学思想の指導を拡大する<sup>41)</sup>」ことを任務として組織されたのである。ここには、抗日民族統一戦線下における文学の役割が明確に規定されていた。

こうした文芸工作は、一九三六年一月人民抗日劇社が延安で公演をおこない<sup>42)</sup>、三月には『紅色中華』がソ区の歌曲、演劇、活報、京調、小説、絵画等の各種の芸術作品を募集<sup>43)</sup>すること等の活動を通じて実践された。六月に保安を訪れたエドガー・スノーは、人民抗日劇社の活動の特徴を、つぎのように証言している。「共産主義者達は殆どすべて自分たちで脚本と歌をつくる。なかには多芸な幹部の寄稿になるものもあるが、大部分は宣伝部所属の脚本家や芸術家が作成した。」「共産主義運動の宣伝武器として赤い演劇隊ほど強力なものはないし、またこれ以上巧妙に運用されているものもない。たえず番組を変え、生まの新聞の場面はほとんど毎日とりかえ、軍事、政治、経済、社会の新しい諸問題を芝居の素材とし、疑問や質問は、懐疑的な農民に対して、ユーモアたっぷり分かりやすく、解答される<sup>44)</sup>」と。ここでエドガー・スノーが鑑賞したのは、短劇『侵略』、舞踏『豊収舞』、『統一戦線舞』<sup>45)</sup>等であった。

このような特徴を持つ文学潮流は、明らかに江西ソビエト区の文学潮流を抗日民族統一戦線のなかに引き継いだものであった。こうした情況のなかで中国文芸協会が発足し、冒頭で指摘した成仿吾の発言がなされるのである。成仿吾の

発言は、一九三七年一月、中国文芸協会が、延安で連合戦線下の文芸運動に関する座談会を開催した際に出された国防文学論争の評価の延長線上に位置していたのである。

国防文学論争は、その是非を議論される際に「文学は、政治と離れる事はできない。このため当面の革命的な文芸運動は、当面のすべての政治情勢に協力しなければならない。『国防文学』と『民族革命戦争の大衆文学』のどちらがより適しているかを判定するには、当面の政治情勢をもってそれを評定するための尺度にせざるを得ない<sup>(46)</sup>」という基準が存在した。そしてここから中共中央局宣伝部長呉亮平は、つぎのように結論した。『国防文学』と『民族革命戦争の大衆文学』の二つのスローガンの論争に関して、我々は毛沢東、洛甫、それに博古らと協議したが、当面国防文学のスローガンはより現状に適合したものと認識する。民族革命戦争の大衆文学のスローガンは前進する文芸集団の標識にするにはよいが、全国的文芸界の連合戦線を組織するスローガンにするには、性質上大変狭い。しかし双方は、根本的に衝突するものではない。国防文学に至っては、文芸家の連合の標識とするような理論は誤りである。それは形式と内容の不一致を引き起こすからである。文芸家は、国防文学の旗のもとに連合するが、創作上では国防文学をその範囲としなければ正しくない。――中略――我々の現在の任務は、団結と禦侮にあり文芸運動はこの目標に従っておこなわなければならない」と。そして国防文学論争に結論を下した後、中国文芸協会は、全国的文芸界をさらに緊密に団結させ、統一戦線の建設を進め「ソ区文芸運動の発展に力を注ぎ、紅軍のなかに文芸通信工作を建設する<sup>(47)</sup>」ことを決定したのである。

こうした決定は、三七年八月に丁玲、吳奚如らが戦地服務団の結成を高く評価し、丁玲に対して前線では「部隊に近づき、群衆に近づき、接結びつく。毛沢東は、西北戦地服務団の結成を高く評価し、丁玲に対して前線では「部隊に近づき、群衆に近づき、党の政策を宣伝し、党の影響を拡大する」ようにとのべ、宣伝は「群衆が喜んで見たり聞いたりするように大衆化しな



ければならない。現在多くの人々が旧い形式に新しい内容を盛り込むと語っているが、新しい形式に新しい内容を盛り込んで、旧い形式に新しい内容を盛り込んでよい。ただ抗戦にとって有利でなければならぬ<sup>48</sup>」と指示した。ここには、文芸の大衆化が抗日民族統一戦線のなかで第一の課題にされていた。翌三八年一月、延安戦歌社が、「詩の朗読問題」座談会を挙行し、朗読詩の条件として、内容が真実で大衆を感動させることができることと言語が大衆的であることを重視し<sup>49</sup>、二月に辺区文協が、歌謡を募集する告示をだし「旧形式を利用して新しい内容を盛り込むこと、あるいは歌謡の格調と特徴を採用して新詩歌を創造することは、抗戦と新詩歌の大衆化に大きく作用する<sup>50</sup>」とのべたのは、抗日民族統一戦線のなかで文学の大衆化の方針が明確にされたものであった。

一九三八年四月、魯迅芸術学院が延安に成立した。魯迅学院は、「芸術—演劇、音楽、美術、文学は、宣伝、扇動であり、群衆を組織する最も有力な武器である。芸術に携わる工作者は当面の抗戦に欠くことのできない力量である<sup>51</sup>」との認識から「マルクス・レーニン主義の理論と立場で、中国新文芸運動の歴史の基礎の上に、中華民族新時代の文芸理論と實際を建設し、今日の抗戦の需要に適した芸術幹部を訓練し、新時代の芸術の人材を団結し養成することで、魯迅を中共の文芸政策のとりでとなし、核心にする<sup>52</sup>」と定められた。魯迅芸術学院は、魯迅の名を採用することで「魯迅の切り開いた道に向かって前進するように<sup>53</sup>」文芸工作者を鼓舞し、中共の文芸政策の下で本格的に文芸工作者を養成し、組織しようとする意図をもっていたのである。

ここに至って、毛沢東の文学に対する姿勢がより明確に現われるのである。毛沢東は翌五月に、魯迅芸術学院において講話をおこなった。ここで毛沢東は、上海からきた文芸部隊とソビエト区の文芸部隊が合流したことで、相互に学習し団結しなければならないこと、文芸工作者は人民の生活のなかに深く入らなければならないこと、文学芸術には階級

性があり、資産階級の文学者は芸術至上を提唱してもそれは資産階級に服務するものであること、無産階級文芸工作者は革命闘争に参加し、人民の言葉を学習しなければならないこと、革命闘争のなから学ぶものは非常に多いこと、等を語った<sup>54</sup>のである。

この毛沢東の見解は、中国民間文芸芸術の旧形式をどのように活用するか、五四文学運動の大衆的、現実主義的、民族的伝統を如何に継承するかという議論がなされているなかで現われたものであった。こうした議論のなから、一九三九年に魯迅芸術学院の文芸工作者が農村地域に入り労働に参加し<sup>55</sup>、そのなかで文芸の大衆化、民族化が求められていく文学潮流が出現する。その結果、「広大な作家群が敵の後方に行き」、「『文章入伍』の工作を強化し」、「『文章下郷』のスローガンを実現し」、「日本帝国主義の暴行を暴露する<sup>56</sup>」ことが文芸工作者に緊急に求められていくのである。

周揚はこうした文学の動向を「反日の文学は、労働大衆の階級の立場と民族の立場が一致したものである。日本帝国主義の侵略が全ての民族各階級の生存を脅かす危機に際して、日本帝国主義に反対することは、全民族各階級の共同の任務である<sup>57</sup>」とのべた。ここでの文芸工作者は、毛沢東が知識人が革命的であるか、否か、それとも反革命的であるかの境界は、彼らが労働民衆と結合することを願うかどうかにあるとのべた<sup>58</sup>ように、その思想的立場は厳格に強要されたのである。

以上から抗日民族統一戦線での文学は、一九三〇年代の江西ソビエト区のなかで発展してきた紅軍の伝統をもつ文学潮流が継続発展するなかで、政治の一部としての役割を担っていくことが強要されていたことがわかるのである。したがって、国防文学論争を評価する際に、そこに現われた魯迅の文学精神は全く顧みられることはなかった。毛沢東にとり、国防文学論争は「革命陣営内部の論争」であり、この論争は、路線、政策が変更するときに革命陣営内部の理論水

準と政治の水準が不均衡であったために発生した「避けることのできない」論争にすぎなかった。彼にとり魯迅は「中国無産階級文学運動の旗手」であり、魯迅に誤りがあり彼の話に不適当なものがあつたとしても、それは「彼の当時の境遇が不自由であつたために、広範な群衆と結びつくことができなかつたことによる」<sup>59</sup>ものであつた。この魯迅解釈は、江西ソビエト区において紅軍のなかで、宣伝機能を重視した文芸政策を指導した毛沢東の一貫した文学観から導かれた文学者像そのものであつたのである。

#### 四、結語

—毛沢東の魯迅評価—

私は本稿で以下のことを明らかにした。

一九三〇年代の中国文学の潮流は、上海の左翼文壇と江西ソビエト区でそれぞれに發展していた。上海の左翼文壇は、左翼作家連盟が中心となり左翼文学運動を推進していたが、魯迅を中心とする左翼作家と周揚等を中心とする党文学官僚との間には、政治と文学の関係をめぐって認識の食い違いが存在していた。一九三六年に上海の左翼文壇を二分する論争に發展した国防文学論争は、中共が提示した抗日民族統一戦線に対して文学の「神聖な任務」をめぐり魯迅と周揚が全面的に対立した論争であつた。ここでは党の政策を遂行する際に、文学を一つの手段にして作家を組織しようとした周揚に対して、作家の主体性とそれと表裏一体の関係にある創作の自由を盾に魯迅が対立したのである。ここには、政治と深く関わりながらもあくまで作家の主体性を確立しようとする魯迅の文学精神が現われていた。

一方江西ソビエト区では、一九二九年に毛沢東が紅軍内部の宣伝仕事を重視する政策を打ちだして以降、文学は一貫

して党の政策を宣伝し、農民大衆を革命に参加させる機能を果たすものとして認識されてきた。ここでは文芸工作者は、党の政策を推進するために人民大衆と一心同体となることを求められていたのである。

魯迅が死去した一九三六年十月以降、日中戦争の激化により文壇の中心がソビエト区に移るにつれて双方の文学潮流は、より直接的に接触をもつようになる。ここで抗日民族統一戦線における文学の役割が新たに問われる。この時、国防文学論争は「当面の政治情勢を尺度」にして論争の是非が議論されたのである。ここに現われた評価は、明らかに魯迅と対決した周揚が示した文学姿勢を是認するものであった。このことは、一九三七年以降の文学潮流は、宣伝としての機能を濃厚にもつ文学潮流が主流を占め、魯迅が左連内部で主張した文学姿勢とそれを支えた文学精神は、全く顧みられることもなく排除されたことを意味したのである。しかもこうした文学潮流は、毛沢東が魯迅に高い評価を与えながら形成されたものであった。

この毛沢東の魯迅評価は、魯迅が死去した直後から表明され<sup>60</sup>、一九四〇年の新民主主義論のなかにより鮮明に表わされるに至るのである。ここで評価された魯迅は、中国共産党の政治路線の一翼を担う「文化革命の主将」としてのものであり、彼はすべての進歩的な文化工作者が農民大衆の生活のなかに入り彼らと一心同体となり、中共の政策を浸透させる革命の歯車としての役割を果たす模範としての役割を担っていたのである。

こうした毛沢東の魯迅評価は、さらに一九四二年の延安文芸講話において、延安の現実を批判した左翼作家の文学精神を批判することにより明確に示されるのである。ここで批判された作家のなかには、魯迅が左翼作家としてその資質に高い評価を与えていた人々が含まれていた。毛沢東は、魯迅の文学精神を受け継いでいた左翼作家を批判し魯迅を偶像化することで文芸政策を確立したのである。

- (1) 毛沢東「新民主主義論」―日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第十卷、勁草書房、一九七四年、一九九頁。
- (2) 同右、二〇六頁。
- (3) 陽翰笙「中国左翼作家連盟成立の経過」―中国社会科学院文学研究所〈左連回憶録〉編輯組編『左連回憶録(上)』、中国社会科学出版社、北京、一九八二年、六十三頁。吳黎平「長念文苑戰旗紅」―『左連回憶録(上)』、七十五頁。
- (4) 魯迅「魏晋の風度および文章と、薬および酒の關係」―学習研究社版『魯迅全集』第五卷、一三二頁。
- (5) 林田慎之助「魯迅のなかの古典」、創文社、一九八一年、一〇二頁―一〇五頁。
- (6) 潘漢年「左翼作家連盟の意義」―『拓荒者』第一卷第三期、文津閣、影印本、一一〇四頁、一一〇六頁。
- (7) 沈端先「文学運動の幾個重要問題」―『拓荒者』第一卷第三期、文津閣、影印本、一〇七四頁。
- (8) 論争過程で、『文学月報』第一卷第四期(一九三二年十一月)に芸生「漢奸的供状」が発表された。これに対して、魯迅は同誌第一卷第五・六期に「辱罵和恐嚇決不是戰闘」を発表し、その論争態度を批判した。
- (9) 魯迅「小品文の危機」―学習研究社版『魯迅全集』第六卷、四〇九頁。
- (10) 任白戈「我在左連工作的時候」―『左連回憶録(上)』、三七五頁。胡風「回憶参加左連前後」―『新文学史料』第三期、一九八四年八月、四十八頁。
- (11) 胡風「人民大衆向文学要求什么?」―『国防文学論戰』、新潮社版、一九三六年、香港影印本、一五四頁。
- (12) 周揚「現階段的文学」―『国防文学論戰』、一七四頁。
- (13) 周揚「与茅盾先生論国防文学的口号」―『国防文学論戰』、三四五頁。
- (14) 馮雪峯「回憶魯迅」、人民文学出版社、北京、一九五三年、一五五頁―一五六頁。
- (15) 魯迅「徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について」―学習研究社版『魯迅全集』第八卷、五九五頁。
- (16) 馮雪峯、前掲書、一六三頁。
- (17) アグネス・スメドレー「中国の暗黒を通して」―『資料世界プロレタリア文学運動』第三卷、三一書房、一九七五年、五一九頁。

- (18) 陳伯達「文学界兩個口号問題應該休戰」—『国防文学論戰』、五九七頁—六〇二頁。
- (19) 「蘇区文芸運動大事記」—汪木蘭 鄧家琪編『蘇区文芸運動資料』、上海文芸出版社、上海、一九八五年、三七五頁—三七六頁。左萊 梁化群著『蘇区紅色戲劇史話』、文化芸術出版社、北京、一九八七年、一五頁。
- (20) 「紅軍第四軍第九回黨員代表大會（古田會議）の決議」—『中国共産党史資料集』第四卷、一九七二年、五七四頁—五七九頁。
- (21) 『蘇区紅色戲劇史話』、一〇頁—一三頁。
- (22) 同右、三十五頁。
- (23) 前掲、「蘇区文芸運動大事記」—『蘇区文芸運動資料』、三八一頁。
- (24) 「蘇維埃文化建設開端 工農劇社公演巨劇 藍衫劇団同時開学」—『蘇区文芸運動資料』、六十一頁。
- (25) 「〈紅色中華〉 文芸副刊〈赤焰〉 発刊詞」—『蘇区文芸運動資料』、二二三頁。
- (26) 「馬克思主義研究会成立文化研究組」—『蘇区文芸運動資料』、八十七頁。
- (27) 「革命歌謡選集」代序—『蘇区文芸運動資料』、二二二頁。
- (28) 「蘇維埃劇団的組織法」—『蘇区文芸運動資料』、二一七頁。中央ソビエト劇団の任務として、ソビエトの革命演劇運動を研究し発展させ、無産階級意識を演劇運動の指導力とすること、演劇等の芸術宣伝を用いて、一般的な革命闘争に参加し、労働紅軍の革命戦争を援助すること、革命と闘争精神を発揚し、計画的、系統的に封建思想、宗教、迷信、資産階級文芸意識と断固とした闘争を行うこと等が定められていた。
- (29) 戈麗「蘇維埃劇団春耕巡回表演紀事」—『蘇区文芸運動資料』、一一一頁—一一六頁。
- (30) 前掲、「蘇区紅色戲劇史話」、六十五頁。
- (31) 前掲、「蘇区紅色戲劇史話」、七十頁—七十三頁。
- (32) 趙品三「関于中央革命根据地話劇工作的回憶」—『中国人民解放軍文芸史料編輯部編』『中国人民解放軍 文芸史料選編 紅軍時期上冊』、解放军出版社、北京、一九八六年、三十九頁。
- (33) 同右、四十三頁。
- (34) 傅鐘「紅軍的文芸工作」—『中国人民解放軍 文芸史料選編 紅軍時期上冊』、三十四頁—三十五頁。

- (35) 成仿吾「写什么？」——『蘇区文芸運動資料』、二四一頁。
- (36) 「文芸工作者協會緣起」——『蘇区文芸運動資料』、一三〇頁。
- (37) 「毛主席講演略詞 我們要抗日就要停止內戰 要停止內戰就要文武都來」——『蘇区文芸運動資料』、二三〇頁—二三二頁。
- (38) 「博古主席講演略詞 使蘇区的文芸協會成為民族革命戰爭中戰鬪力量」——『蘇区文芸運動資料』、二三四頁。
- (39) 「洛甫同志講演略詞 以文芸的方法具體的表現去影響推動全國人民促成鞏固的統一戰線」——『蘇区文芸運動資料』、二三二頁—二三三頁。
- (40) 「中国文芸協會十一月二十二日召開成立大會 党政諸領袖講演、通過會章進行選舉」——『蘇区文芸運動資料』、一三五頁。
- (41) 「中国文芸協會的發起」——『蘇区文芸運動資料』、一三四頁。
- (42) 前掲、「蘇区文芸運動大事記」——『蘇区文芸運動資料』、三九四頁。
- (43) 「中央芸術教育委員會啓事」——『蘇区文芸運動資料』、一二二頁。
- (44) エドガー・スノー、松岡洋子訳増補決定版『中国の赤い星』、筑摩書房、一九七五年、七十九頁。
- (45) 前掲、「蘇区文芸運動大事記」——『蘇区文芸運動資料』、三九五頁。
- (46) L. Tsun 陝北文芸運動的建立——『蘇区文芸運動資料』、一七五頁—一七六頁。
- (47) 同右、一七八頁—一七九頁。
- (48) 艾克恩編纂『延安文芸運動紀盛（一九三七年一月—一九四八年三月）』、文化美術出版社、北京、一九八七年、二十五頁。
- (49) 同右、四十三頁—四十四頁。
- (50) 同右、四十七頁。
- (51) 「魯迅芸術学院創立緣起」——高彬責任編輯『延安文芸叢書 第一卷文芸理論卷』、湖南人民出版社、長沙、一九八四年、七八一頁。
- (52) 羅邁（李維漢）『魯迅的教育方針与怎样實施教育方針』——『延安文芸叢書 第一卷 文芸理論卷』、七八六頁。
- (53) 同右、七八一頁。
- (54) 前掲、『延安文芸運動紀盛（一九三七年一月—一九四八年三月）』、六十九頁—七〇頁。
- (55) 同右、一一五頁。

- (56) 同右、一二五頁。
- (57) 周揚「從民族解放運動中來看新文學的發展」——『延安文芸叢書 第一卷 文芸理論卷』、四〇九頁。
- (58) 前掲、『延安文芸運動紀盛（一九三七年一月—一九四八年三月）』、一二七頁。
- (59) 同右、七十一頁—七十二頁。
- (60) 毛沢東「論魯迅」——『延安文芸叢書 第一卷 文芸理論卷』、三〇頁—三十二頁。毛沢東は、魯迅精神を政治的遠見、闘争精神、犠牲的精神から解説し、それに高い評価を与えていた。